

切目王子信仰とその変容

山本陽子

〈要旨〉切目王子は、ほとんどの熊野曼荼羅において片足に描かれている。筆者はその理由を求め、『後崇光院宸筆宝蔵絵詞』(切部絵)の内容と共通し、さらに古来の伝承に遡ると考察する論文¹⁾と、熊野権現と切目王子という熊野の神々間の位相に関する論文²⁾を書いた。近年、阿部泰郎が切目王子の由来に関する新説を出しているため、改めて検証を加えた。

また奥三河花祭と備中石見神楽には切目王子に関する演目があり、『紀伊続風土記』では、切目王子社の祭神を『日本書紀』の地神五代とするが、これらは切部絵の物語や従来の伝承とは結びつかない。なぜこのような演目や記述が存在するのか。本論では切目王子社および外部においてその信仰がいかに変容したかを、この神社の近世初期における衰微と再生の記録によって考察するものである。

1. 片足の切目王子

切目王子は熊野九十九王子の一社である。九十九王子とは、京都から熊野詣をする途上の、紀伊路・中辺路にある数多の神社もしくは拝所を指す。平安末期から鎌倉初期、天皇や貴族たちの熊野詣が盛んになった頃に設定されたもので、そこで旅の安全を祈願し、休息したり歌を詠んだりしたという。九十九王子のそれぞれは、かつてその土地で古くから祀られていた小社であったと思われるが、確かなことはわからない。

切目王子は参詣路の中程にあり、九十九王子の中でも比較的大きく、藤代・切目・稲葉根・滝尻・発心門という五体王子の一つに数えられる王子社である。これら九十九王子が熊野の神々の中でどのような立場にあるかは、例えばひな壇状に熊野の神々が描かれた【図1】の和歌山県立博物館所蔵の熊野垂迹神曼荼羅図によって知ることができる。

最上段は那智・本宮・新宮の熊野三所権現、その下段

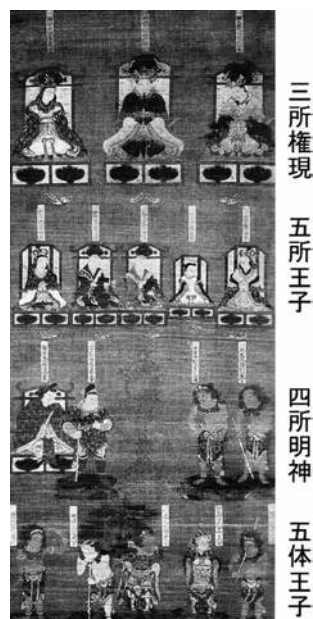


図1 熊野垂迹神曼荼羅図
(和歌山県立博物館所蔵)

に若宮・禪師宮・聖宮・児宮・子守宮の五所王子、さらに下段に一万十万・勸請十五所・飛行夜叉・米持の四所明神、そして熊野の神々の中の最下段に位置するのが五体王子を筆頭とする九十九王子である。熊野曼荼羅によっては、九十九王子は描かれないことさえある。つまり九十九王子は、礼拝対象として描かれるかどうかの境界、神と人との中間に位置する存在なのである。

熊野曼荼羅の中でこれらの王子は多様な姿で表されるが、熊野参詣者の守護という役割から、甲冑を着た武装形か、半裸で武器を持つ童子形に描かれる場合が多い。この曼荼羅の切目王子もその後者の姿であるが、武器にもなり得るような杖を突いているため目立たないものの、よく見ると右足が描かれていない【図2】。熊野曼荼羅の切目王子はなぜ、右足のない姿に描かれたのだろうか。



図2 熊野垂迹神曼荼羅図
切目王子部分
(和歌山県立博物館所蔵)

2. 『後崇光院宸筆宝蔵絵詞』（切部絵）

切目王子の右足と関連付けられる物語に、文安三年（1446）年書写の宮内庁書陵部所蔵『後崇光院宸筆宝蔵絵詞』として、「切部絵」（切目は切部とも記される）詞書³⁾が伝わる。内容は以下のごとくである。

切部王子が熊野権現から僧の護衛をせよと申しつかる。厠に行くときも離れない王子を疎んだ僧が「腐った^{なま}椰木に鯛を入れて頭から浴びればよい」と助言され、実行する。怒った王子が「権現に命じられたから辛くても従ってきたのに、なぜひどいことをする」と僧の鼻をはじくと、僧は死んでしまう。切部王子が熊野権現にこの経緯を報告すると、権現は罰として王子の右足を切り、切部山に放った。

権現に勘当された切部王子は、熊野参詣者の福幸を奪い取る。熊野権現はその対策を、稲荷明神の配下で王子と親しいあこまちに求める。あこまちが「私の信者たちが、熊野詣の帰りにあなたに福幸を奪われている」と訴えると、切部王子は「豆の粉の化粧をした者をおまえの信者と見わけて、福幸を取らないでおこう」と約束する。そこで以後、熊野詣の者は豆の粉の化粧をする習慣になったという。

この『宝蔵絵詞』自体は、詞書の末尾に「昔はこのことを知る者がなく、坂東の先達が、示現によりその由来を知った」と記されるので、古くから現地に伝わった話ではなく、熊野信仰をもとに中世の東国で創作された物語と考えられる。ただし当時の切目社における信仰を反映した物語であることは、熊野曼荼羅の切目王子に右足がないこと以外にも、切目王子を避けるために「腐った椰木」が使われたことと、豆の粉の化粧の由来からも知ることができる。

椰木は、切目王子の地に欠かせない呪具である。かつて熊野詣の途上、切目の地で参詣者が魔除けに椰木の葉をかざす慣習が存在したことは、平安末期の『梁塵秘抄』に「熊野に出てて切目の山の椰の葉し万の人のうはぎなりけり」⁴⁾ また『保元物語』に「切目の王子の南木の葉を、百度千度かざさんとこそ思し召ししに」⁵⁾、『平治物語』でも、平治の乱の知らせを切目の坂で受けた清盛が

熊野詣から引き返す場面で、「諸人の、かざしにさしたるなぎの葉を、射向の袖にぞ付たり」⁶⁾と語られている。この地で豆の粉の化粧をすることも、『熊野詣日記』に切目社において熊野参詣者が豆の粉で化粧をし、「いなりの氏子こうこう」と鳴きまねをした記録⁷⁾が存在することから、実際の慣習であったことが判る。

3. 『宝蔵絵詞』と熊野曼荼羅

最初にこの物語と熊野曼荼羅中の片足の切目王子とに言及したのは、鈴木宗朔の「熊野参詣儀礼の記録と説話一切目王子の豆の粉化粧説話をめぐって」⁸⁾である。鈴木は『宝蔵絵詞』の切部王子の性格を、善悪の両義性を持ちつつ参詣者を守護する護法童子と見る。物語がどこまで遡るかの考察において、熊野本宮大社所蔵熊野曼荼羅（後出表・5）の切目王子の右足がないことを指摘し、「この図像は鎌倉期にそのような説話と伝承が存在したことを裏付ける。語り手が切目王子の右足欠失理由についての説明を要し、『宝蔵絵詞』に近いテキストで絵解き唱導が行われた図証となろう。「本宮本」の成立期は様式上から南北朝期とされているが、画材としての説話の成立期は、鎌倉期のどの時分まで遡るのかの確定が今後の課題」とする。

一方、片足の切目王子を図像の側から考察したのが、拙論「切目王子像小考—熊野曼荼羅から一本ダタラまで—」（注1参照）である。まず、熊野曼荼羅諸本の切目王子像を比較して、意図的に片足に描かれていることを確認する。ほとんどの切目王子の姿が不動明王眷属の制吒迦童子【図3】に基づくこと、制吒迦童子と、同じく制吒迦童子の図像に基づいて描かれる書写山の乙護法や葛川護法童子、春日赤童子には片足の図像がないことを指摘した。

その上で、制吒迦童子の性格が「不動十九相観」⁹⁾に「共に語り難き悪性の者」、『不動使者陀羅尼秘密法』¹⁰⁾に「猶、人間の悪性の如く、下に在りて駆使を受けると雖も、常に過失多き也」と、悪性で過失の多い使神と設定されていること、同様に制吒迦童子像に基づいて表される乙護法も悪性を持つとされることを挙げ、切目王子が『宝蔵絵詞』の切部王子と共通する「従者としての愚直なまでの忠実さと霊力、ひとたび怒ったときの並外れた破壊力、その両面性を持つて描かれていることを指摘した。

さらに『宝蔵絵詞』と熊野曼荼羅の切目王子とに共通する片足神の由来として、『紀伊国統風土記』¹¹⁾の「昔、一踏鞴といふ妖賊が熊野権現の神宝を奪い雲取越えの旅人を掠め」た記事、柳田国男の「一目小僧その他」¹²⁾で熊野の一踏鞴、または一本ダタラが一目一足の山神につながる妖怪とされることに着目した。王子の「切目」という特異な呼称¹³⁾と、熊野の麓乱神が「大豆香ヲ目ニイレテ眼ヲクラマス」ことで撃退されるとする『両峯問答秘鈔』¹⁴⁾の記事から、切目王子には熊野の一本ダタラのような一目一足の山神としての伝承



図3 制吒迦童子
（醍醐寺所蔵 不動図巻
玄朝様不動御頭并二使者
図像 部分）

が投影されていると考察した。

また説話の面から『宝蔵絵詞』を考察した沢井耐三も、「熊野・切目王子伝承『宝蔵絵詞』考一亀乱神・阿古町・豆粉の化粧一」¹⁵⁾において、いくつかの熊野曼荼羅中に切目王子が片足で描かれていることと、片足神の先例として「一目小僧その他」により、一本ダタラを挙げています。

4. 熊野曼荼羅諸本における切目王子の検討

ところで近年、阿部泰郎は「絵ものがたりとしての「道成寺縁起」絵巻の世界」¹⁶⁾において『宝蔵絵詞』を取り上げる中で切目王子に触れ、「熊野曼荼羅では切目王子は片足で立つ図像として描かれるが、それが片足を切られるという伝承を生んだらしい」という。たしかに文安三年(1446)年の書写なので、『宝蔵絵詞』の原本が成立時期はこれら熊野曼荼羅と同時期か後かとは考えられるが、「片足の切目王子」という伝承の起源を熊野曼荼羅の切目王子の図像に求められるのだろうか。

そこで改めて、切目王子を含む九十九王子が描かれた熊野曼荼羅の諸図【表】¹⁷⁾で、比較検討したい。この25件の熊野曼荼羅の制作時期は、いずれも鎌倉から室町時代とされ、『宝蔵絵詞』及びその原本成立の時代と重なっている。各曼荼羅の熊野の神々の姿には本地仏形、垂迹神形の双方があり、配置も熊野の風景中に配されたもの、胎蔵界曼荼羅に倣って八葉蓮華中に表されたもの、雛壇状に並べられたもの、各社殿や鳥居中に描かれたものと多様なので、構図の近似する作例ごとにまとめ、類例の中では製作年代の古いと思しきものから順に並べた。

中央が切目王子の右足の有無の欄である。切目王子の右足がないものが灰色のマスで19件で、3件は曼荼羅の損傷から切目王子を判別できず、残る7・13・24の3件では両足がある。そこで両足のある根津美術館本・仁和寺本・西南院本を、同じ形状の他の熊野曼荼羅と比較した。7の根津美術館本と同様に本地仏を八葉蓮華に配した作例は4～9の5件ある。時代が先立つ4～6の3本と比べると、上方に大峰八大童子、下方に阿須賀や神倉と九十九王子がある構図も近似し、切目王子

表「熊野曼荼羅図中の切目王子の表現」

所蔵者	作成年代	配番	十二所身容	童子形か	体色	右足	持物	履装	短冊形の名跡	備考
1 聖蹟院	鎌倉	風景中	本地仏	童子形	朱	なし	宝棒?	和装	不明	みずら髪
2 六万寺	鎌倉か	風景中	本地仏	不明	不明	不明	不明	不明	不明	図様不明
3 熊野那智大社	鎌倉	風景中	本地仏	不明	不明	不明	不明	不明	不明	下方切れる・図様不明
4 高山寺	鎌倉	八葉蓮華	本地仏	童子形	朱	なし	杖	半裸	なし	
5 熊野本宮大社	鎌倉	八葉蓮華	本地仏	童子形	朱	なし	杖	半裸	切目	
6 文化庁	鎌倉	八葉蓮華	本地仏	童子形	朱	なし	杖	半裸	十一面切目金剛童子	
7 根津美術館	鎌倉	八葉蓮華	本地仏	童子形	淡朱	有り	杖	半裸	不明	
8 聖蹟院	南北朝	八葉蓮華	本地仏	童子形	朱	なし	杖	半裸	□□(不明)王子	文化庁本に近似
9 西明寺	室町	八葉蓮華	本地仏	童子形	淡朱	なし	杖	半裸	切目王子	
10 明石寺	室町	八葉蓮華	垂迹神	童子形	淡朱	なし	杖	半裸	切目□□(不明)	中尊2体・尊像多し・右から三番目
11 ポストン美術館	鎌倉	雛壇状	本地仏	童子形	朱赤	なし	杖	半裸	なし	三尊が手前
12 ムトロボリタン美術館	南北朝	雛壇状	本地仏	童子形	朱赤	なし	杖	半裸	なし	三尊が手前
13 仁和寺	南北朝	雛壇状	本地仏	童子形	朱赤	有り	杖	半裸	切目金剛童子	
14 市神社	南北朝か室町	雛壇状	本地仏	童子形	朱赤	なし	杖	半裸	なし	
15 竹林院	室町	雛壇状	本地仏	童子形	朱赤	なし	杖	半裸	なし	
16 蓮隆寺	室町	雛壇状	本地仏	不明	不明	不明	不明	不明	不明	判別不明
17 静嘉堂文庫	鎌倉	雛壇状	垂迹神	童子形	朱	なし	杖	半裸	不明	
18 和歌山県立博物館	鎌倉	雛壇状	垂迹神	童子形	朱	なし	杖	半裸	切目金剛童子	静嘉堂本と近似
19 鎌倉寺	鎌倉か南北朝	雛壇状	垂迹神	童子形	朱	なし	杖	半裸	切目金剛童子	静嘉堂本と近似
20 個人蔵	鎌倉	雛壇状	垂迹神	童子形?	不明	なし	杖	半裸	切目王子	背景無し・図版モノクロで色不明
21 東京国立博物館	室町	雛壇状	垂迹神	童子形?	不明	なし	杖	半裸	なし	(西来寺旧蔵)
22 聖蹟院	鎌倉	各社殿	垂迹神	童子形	朱	なし	杖	半裸	切目王子	社殿内に十二所権現
23 湯泉神社	鎌倉か南北朝	広い雛壇状	本地垂迹	童子形	青	有り	杖	半裸	切目	各王子に鳥居
24 西南院	室町	広い雛壇状	本地垂迹	童子形	青	有り	杖	半裸	不明	各王子に鳥居・湯泉神社本に近似
25 和歌山県立博物館	室町	背景なし	垂迹神	童子形	淡朱	なし	杖	半裸	切目金剛童子	背景無し

の形状も共通するが、根津本以外で切目王子の右足はない。そこで根津本は、先行するこれらのような図柄をもとに制作する時に、誤って切目王子に右足を描き足してしまったものと考えられる。

13の仁和寺本の切目王子は片足立ちだが、右足を後ろの方へ跳ね上げたつま先が描かれている。同じく本地仏を階段の上に鄙壇上に並べた形式は11～15で、他に4件ある。同形式の件、ボストン美術館本・メトロポリタン美術館本・市神社本・竹林院本と比較すると、切目王子は色も杖を突く姿も似ているが、いずれも片足立ちで、仁和寺本のような跳ね上げた右足先はない。仁和寺本では、右足を跳ね上げたものと勘違いして足先を描いてしまったと思われる。

24の西南院本の青い切目王子も、右足を跳ね上げた先に足先がある。同じく九十九王子が鳥居の中に描かれる構図で先行する湯泉神社本と比較すると、双方とも体色は青く描かれるが、湯泉神社本には右足先はない。これも西南院本が湯泉神社本を写すときに右足先を描き足してしまったと考えられる。以上のように右足のある3件は、近似する構図の類例と比較することで、いずれも先行する熊野曼荼羅を写すときに、誤って右足を描き足してしまったと考えられる。

このような片足の姿は、熊野曼荼羅の他の王子や神々にも、他の神道曼荼羅にも見ることはできない。仏教尊像で片足立ちをするものに摩利支天像や金剛童子像、修験系の尊像としては蔵王権現像があるが、いずれも反対側の足を大きく振り上げた姿勢で、片足がないわけではない。片足で直立する像に六字明王像【図4】があるが、跳ね上げた右足先が左もの横に必ず描かれている。

熊野曼荼羅には他にも様々な形式があり、切目王子の姿も同じではない。たとえば最古とされる1の聖護院本で切目王子は、みずらを結った和装で、杖を突かずに棒状のものを捧げ持つが片足立ちで、右足はない。どの構図のどのような姿でも全て、時代の古い切目王子には右足がない。聖護院本以外はいずれも制吒迦童子の図様を借りた姿であるが、多様な制吒迦童子像の中でも杖を振りかざす姿や杖を肩に担ぐ姿ではなく、いずれも杖を突いて立つ図様のうちから選択されていることも、「片足がなくて杖を突いている」という想定に裏付けられたものと考えられる。片足の切目王子は、両足のある原本の右足を描き落とした過失として発生したものではなく、当初から右足がない姿で熊野曼荼羅に描かれていたのである。

どの形式の熊野曼荼羅でもより古い時代のもので切目王子が片足に描かれているのは、これらに先行する何らかの伝承に基づいたためと推測される。阿部説のごとく熊野曼荼羅の図像が『宝蔵絵詞』の「片足を切られるという伝承を生んだ」のではなく、熊野曼荼羅の切目王子像や『宝蔵絵詞』に先行して「切目王子は片足」という概念が存在したと、考えられる。論者はそこに「一本ダタラ」のような一目一足の山神信仰を想定したい。



図4 六字明王
 (『増補諸宗仏像図彙』巻之二)

5. 奥三河花祭と備中石見神楽の切目王子

切目王子が主人公となる演目は、熊野から離れたところで他にも伝来する。奥三河の花祭には「^{きるめ}切目の王子」という演目がある。花祭では「^{みるめ}切目の王子」と「^{みるめ}見目の王子」が最高神とされ、これを勧請するものである。鈴木正崇によればこれらの神は「熊野の王子信仰を読み替えて守護霊に転化したもので、悪霊を「切る」、不可視のものを「見る」能力を持つ神霊¹⁸⁾とされる。この演目は諸神を勧請する儀式で、特に物語性はなく「諸神諸仏勧請の祭文を唱え一節が終わる度に、文句を唱えながらお神酒に榊の葉を浸し押し頂く、一連の所作を指す」という¹⁹⁾。

備中石見神楽の「切目」も、神を勧請する演目である。直前の演目「^かっ鼓」では「紀伊の国熊野の権現、切目の王子に仕えまつる神禰宜」が舞台に太鼓を置き、「切目の王子この処にご出現しまして、村中安全の御祈禱をなされ候間、神姿をしづしづと御拝みなさるべく候」と予告する。演目が「切目」になると面をかぶった切目の王子が現れて介添と問答し、太鼓を打ち鳴らして舞う。この「切目」は髭のある色白の大人の善神としての面で、舞も両足を踏ん張って舞われるもので、姿形については熊野曼荼羅の片足の童子である切目王子と結びつくところはない。石見神楽の台本²⁰⁾によれば、介添と切目王子の問答で、「さてその垂迹は」^{ことさかお}「事解男、速玉の男、伊弉諾の神社。」といい、事解男は熊野の阿須賀社、速玉は速玉大社であろうが、なぜこの組み合わせかは不明という。

それぞれの内容は、切目王子社から発した「^{かざす}榊の葉をかざす」という形の熊野信仰が反映されたものである。奥三河花祭の勧請でお神酒に榊の葉を浸して押し頂く所作が「^{きるめ}きるめの王子」と呼ばれるのは、切目の地の慣習に倣って、温暖な地方にしかない榊木に替わる榊の葉を頭上にかざすことで神々を呼び寄せたことに由来すると考えられる。石見神楽の「切目」も介添の「熊野なる切目の王子の^な竹柏の葉は^{かざし}髪挿に挿いて御座へ参ろや」という歌で始まるので、切目社を本拠とする熊野の修験者が切目王子を神楽の場に勧請し、村中安全の祈禱をしたものと解されている。しかしいづれの「切目王子」も、熊野曼荼羅と『宝蔵絵詞』に登場する片足で善悪の両義性を持つ童子とは、性格も外見も全くかけ離れたものとなっていて²¹⁾、片足の切目王子の根拠を探ることはできない。

6. 切目王子社と地神五代

切目王子の榊の葉や豆の粉の化粧は、古来歌でも物語でも扱われるものの、片足の切目王子に関する文字資料は『宝蔵絵詞』以外に見いだせない。最大の要因は、切目王子社に近世以前の記録が伝わらないことにある。九十九王子のなかでも五体王子として重視された切目王子社は、中世以降、九十九王子の多くが廃絶した中でも存続してきた。しかし天正13年(1585)の兵火で旧社殿と神宝の類は悉く焼失し、祝の大山英長は戦死、その子孫も仏門に入っていったん断絶し、現在の社は新たな社地で再建されたものという。

ところで仁井田好古等編『紀伊続風土記』の卷之六十七 日高郡切目荘 西野地²²⁾の項では、「熊野御幸記に切部王子とある是なり」として切目王子社は五体王子社として挙げられ、祭神は下記のごとく地神五代となっている。

五體王子社	境内方一町	禁殺生
	大日靈貴尊	
	正哉我勝尊	
本社祀神	瓊瓊杵尊	五座合殿
	彦火火出見尊	
	鷓鴣草葺不合尊	
	牛頭天王	
末社四社	辨才天社	八幡宮 相殿
	金毘羅社	大塔宮社
拝殿	五間半	神輿舎
	二間	

本社祭神が大日靈貴尊(天照大神)と、息子の正哉我勝尊(天忍穗耳尊)、その息子の瓊瓊杵尊、彦火火出見尊(山幸彦)と息子の鷓鴣草葺不合尊の5座とされているのである。熊野の五体王子は九十九王子のうち藤代・切目・稲葉根・滝尻・発心門の五王子を指すはずであった。しかしここでは地神五代とされ、本文では「五体王子の称は、神の御像五あるを以ていふ、或は地神五代なるを以て五代王子といふ、代体音近きを以て転するなりといふ 孰れか是なる事を知らず」という。さらに割註をして「祝家の伝えに神号は覆天雨宮五体王子と称すといふ覆天雨宮何の義なるか知らず」とある。

この五体王子を地神五代とする説は、何に由来するのか、また覆天雨宮とは何の義なのか。祭神の天照大神からは、まず伊勢信仰が考えられよう。しかし伊勢で天照大神と並んで信仰される外宮の豊受大御神の名はなく、他は天孫降臨前後の神々である。また明治後期の和歌山県では神社合祀政策が遂行されているが、『紀伊続風土記』は天保10年(1839)に完成したもので、現在の切目神社祭神は地神五代とさらに違っていること²³⁾からも、神社合祀によったためとは考えられない。

7. 文禄元年(1592)の再建

『印南町史』によれば、切目神社の古記録のうちに『南龍院公御参詣記録』²⁴⁾として、寛文2年(1662)に紀州徳川家初代頼宣が切目社に参詣した記録があり、戸張を開いて神体を拝んだという。神体そのものについての記述はないが、神体が損傷していたので、補修のため彩色を行わせることになったという。その折に当社は古来よりこの地にあったかとの下問があり、「天正中兵乱之節、焼亡仕候、(中略)其後文禄元年八月ニ神道者来て七ヶ月之間に此社を造営仕候、右宮社建立仕候神道者、造営之後社中より行方相知レ不申すとの申伝ニ御座候」と返答されている。さらにこの社の説明として、

五躰王子之命号ハと御尋被レ為レ遊候ニ付、覆天雨宮五躰王子と申候、地神五代之尊神、天照大神御尊号ハ大日靈貴尊ト奉レ申、次ニ正勝吾勝速日天忍穗耳尊、次ニ天津日高彦火々瓊瓊杵尊、彦火々出見尊、彦波瀲武鷓鴣草葺不合尊、以上五代之御神を祭りて五躰王子と奉レ崇申候

とあるので、地神五代と覆天雨宮の呼称は、少なくともこの寛文2年までは遡る。

この説明に登場する文禄元年(1593)に切目社殿を7ヶ月で再建したという神道者とは、明和6年(1769)の「五躰王子宮御鎮座并御宮造営記」²⁵⁾に、

文禄元年(1592) 壬辰八月上旬、日向国高千穂の出性と申来、色々氏子を進(勸)め、七ヶ月之間、五躰王子宮を御造営ス、

と記述されている日向国高千穂の者と思われる。「造営記」によればこの神道者は、

御造営の間、当社に居給ひて、毎夜毎夜神道講釈、神代の巻を読給ふ、式文に曰

一 当社覆天雨宮五躰王子宮ハ、唯一地神五代之尊神を齋祀祭りて則五躰王子宮と申奉也。

と、切目社を五体王子宮と称し、祭神を地神五代と言っている。切目社の祭神が地神五代に変わったのは、天孫降臨の地である高千穂から来た神道者によって祭神が読み替えられた、この時点であろうと推測できる。ちなみにこの地神五代の神々には、いずれの神についても片足といういわれは存在しない。『南龍院公御参詣記録』の南龍院公が拝見し、損じていた彩色を修理させたという五体王子の神体とは、中世の熊野曼荼羅における切目王子の童形で忿怒相で片足という姿とはかけ離れたものであったと思われる。

この神道者は熊野の五体王子を地神五代と読み替えたばかりでなく、造営の間、切目社の氏子に神代の巻の講釈を行い、

然に当社御鎮座之御義を御講釈被遊候得共、是者さいさいへんにて御説被遊候故、我々不学ハして一向に不分明也、然処五躰王子宮五躰の分ヶ、地神之尊神故如期中なりと御講釈御座候、猶又於当社にては、五ツの御使もの有り、此義ハ俗談にて御講釈被遊候、此五ツの訳ヶハ第一辰なり、第二鶏、第三鷺、第四亀、第五鶉

と挙げ、それぞれの動物を地神五代の使いものに充ててその効験も説いている。そして五体王子社の造営が終わった翌文禄二年の二月八日、氏子を集めて「抑々是我は人間には不有、当氏神也」と告げ、「社中ヨリ行方知れず相成申候、神主氏子諸とも、扱々有難や、^{かたじけな}忝や、扱は当社の□御神にて在し給ふ哉、恐多や勿体なやと皆々恐れをなして平伏ス」とあり、切目社は神道者が消えた後も五体王子社として、祝の後を継いだ神主と氏子によって存続することになる。

8. 覆天雨宮という呼称

五体王子が地神五代となった事情はこの記事から見当が付いたものの、もう一つの謎が残る。『紀伊続風土記』五体王子社の割註の覆天雨宮という呼称の由来である。この名称は文禄元年以前の切目王子の信仰や物語には登場せず、文禄元年再建時の神道者の言葉に「当社覆天雨宮五躰王子宮ハ」

と初めて見えるが、地神五代の神々のどの伝説とも結びつかない。

ただ、神道者が姿を消したことを記す『五躰王子宮御鎮座并御宮造営記』文禄二年二月八日条の末尾には唐突に、

- 一 曰切目浦ニ杭石と申伝へこれある島有、されば早魃の節ハ、此嶋におひて雨乞 御禱仕候得ば、則雨を降し候御恵、昔より今に至テ其御氣随あらたなり、斯く有べき筈、神の御使いの辰、此島へ夜ナよな来り遊事、古へより今に同断、有難御恵ミ也

と、切目浦における「昔より」伝わる雨乞いの祈祷について書かれている。この霊験が神道者の「神の御使いの辰」の説と結びついて、「覆天雨宮」という呼称の由来とされた可能性が考えられる。

地元にとっての切目社とは、本来はこのような雨をもたらす神だったのではないだろうか。柳田によれば、一本ダタラのような一目一足の山神は、風雨や雪を司る者でもあるという（註12参照）。例えば三重県の多度山権現に祀られる一目連は一つ目の龍といわれ、風雨の神で遊行の折には暴風を巻き起こすとされている。切目王子が片足なのは、そのような古代信仰の神の痕跡を受け継いだためかもしれない。

切目王子社の信仰は、時代と受容者によって変化してきた。天皇や貴族の熊野詣が盛んに行われた平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけては九十九王子の一として、参詣者を脅かしもすれば道中の守護もする護法童子とされた。熊野曼荼羅に描かれた憤怒形の半裸の童子はその両義性を持つ姿だったであろう。また天正13年(1585)の兵火での焼失と文禄元年(1592)の高千穂出身の神道者による再建以降は、五体王子が地神五代と読み替えられて、全く別の祭神を祀る社に変わっている。たとえば石見神楽の「切目王子」の面が大人の善神で両足があるのは、後者の祭神としての反映であろう。

また、「覆天雨宮」という神号は、かつて切目社が地元の雨乞いの神であったことの痕跡と思われる。一目一足で風雨を司る熊野古来の山神は、新たな熊野権現の信仰によって神の座を追われ、一方では一本ダタラという妖怪、あるいは参詣者の利生を奪う山賊としての伝説になり、他方では参詣者を擁護する護法童子として熊野九十九王子に組み入れられたと考えられる。旅人を擁護する護法童子でありながらも本来の荒々しい山神の面影がわずかに残されていたのが、熊野曼荼羅の片足の切目王子の姿ではないだろうか。

注

- 1) 山本陽子「切目王子小考—熊野曼荼羅から一本ダタラまで—」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・造形芸術学科]第12号 pp.29-36 2004年
- 2) 山本陽子「熊野曼荼羅に見る神仏のヒエラルキー—切目王子を中心に—」大橋一章・新川登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築』pp.321-347 勉誠出版 2012年
- 3) 石塚一雄「後崇光院宸筆宝蔵絵詞」(『那智叢書』第23巻 熊野那智大社 1974年)によれば、この絵詞は伏見宮家に伝わった後崇光院伏見宮貞成親王の書写本で、文安二年の具注暦の紙背に書かれている。本文の前に「絵 以上中巻」、文中の所々に「絵」と入り、巻末に「文安三年二月十五日宝蔵絵詞写了」とあるので、原本が「宝蔵絵詞」と呼ばれる上中下の三巻の絵巻物で、文安三年(1446)年の書写であること

がわかる。ただし現存するのは下巻のみで、写本の上中巻も、原本の絵巻も伝来しない。

『宝蔵絵詞』とは本来の題ではなく、『看聞御記』紙背文書貞成親王書状案に「又切部絵の事は先年或人申いたし候て、紛失して候ほとに、無念申はかり候はす候、室町殿より去々年候やらん絵を御たつね候ほとに、先年焼失し候てのこり候はぬよし申されて候、」とある「切部絵」が本来の題名にあたと推測される。

- 4) 「神社歌 熊野」『梁塵秘抄』巻二 『日本古典文学全集』第25巻 pp.339-340 小学館 1976年
- 5) 「法皇熊野御参詣并びに御託宣の事・法皇崩御の事」古活字本『保元物語』巻上『日本古典文学大系』31 pp.346-348 岩波書店 1974年
- 6) 「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」『平治物語』上『日本古典文学大系』31 pp.206-209 岩波書店 1974年
- 7) 『熊野詣日記(北野殿)』応永三十四年十月六日条(印南町史編集室編『印南町史』資料編 p17 第一法規出版 1987年
- 8) 鈴木宗朔「熊野参詣儀礼の記録と説話一切目王子の豆の粉化粧説話をめぐって」『古文学の流域』pp.343-363 新典社 1996年
- 9) 安然『不動明王立印儀軌修行次第 胎藏行法』『日本大蔵経』第48巻 天台宗密教経疏3 pp.150-154 日本大蔵経編纂会 1920年
- 10) 『不動使者陀羅尼秘密法』『大正新脩大蔵経』第21巻 pp.23-27
- 11) 仁井田好古等編 卷之八十「牟婁郡色川郷檜山村 王子権現社由来」『紀伊国続風土記』第3輯 p86 帝国地方行政学会出版部 1910-11年
- 12) 柳田国男「目一つ五郎考」「一目小僧その他」『定本柳田国男集』第9巻 pp.25-66 筑摩書房
- 13) 『万葉集』巻12-3037では殺を意味すると思しき文字致で殺目山と書かれている。
- 14) 『両峯問答秘抄』『日本大蔵経』第37巻 宗典部 修験道章疏 2 pp.591-6193 日本大蔵経編纂会 1914-1920年
- 15) 沢井耐三「熊野・切目王子伝承『宝蔵絵詞』考—鹿乱神・阿古町・豆粉の化粧—」『(愛知大学) 一般教育論集』第32号 pp.70-82 2007年
- 16) 阿部泰郎「絵ものがたりとしての「道成寺縁起」絵巻の世界」『道成寺と日高川』pp.189-196 和歌山県立博物館 2017年
- 17) 以前の二論文に挙げた表にその後見出し確認できた7件の作例を加え、25件を扱う。
- 18) 鈴木正崇「湯立て神楽と熊野」『熊野と神楽 聖地の根源的力を求めて』pp.42—43 平凡社 2018年
- 19) 「神寄せ」『古戸の花祭』(ZIPANG TOKIO 2020「古戸の花祭は、神仏混淆の形式を色濃く残している唯一の奥三河の花祭【国の重要無形民俗文化財】」<https://webcache.googleusercontent.com/search?q=cach e:eHt78MkCRpUJ;https://tokyo2020-summer.themedia.jp/posts/3294802/+&cd=1&hl=ja&ct=clnk&gl=jp> 2019年11月6日取得
- 20) 篠原實 註訳・編「かつ鼓」「切目」『校定石見神楽台本 復刻版』pp.20-26 細川神楽衣裳店 1990年
- 21) 鈴木正崇は、「切目」の神楽の初見が承応2年(1653)であることや、介添が「木火土金水 青黄赤白黒の色を得て、五柱の神と現れたまふ」ということから、後出の五所王子を地神五代と読み替えた後の切目社の影響と見る。論者もこれに賛同したい。
- 22) 仁井田好古等編 卷之六十七「日高郡切目荘 西野地村」『紀伊続風土記』第2輯 pp.570-572 帝国地方行政学会出版部 1900年
- 23) ちなみに現在の切目神社の祭神は、主祭神を誉田別命、配祀神を猿田彦命・金山彦命・須佐男命・天児屋根命・事代主命・迦具土命・三筒男命・倉稻魂命・蛭子神・龍王神、境内社を大塔神社・浦安神社・地宗神社として、『紀伊続風土記』の祭神と、境内社の大塔神社以外は入れ替わっている。(和歌山県神社庁 <http://wakayama-jinjacho.or.jp/jdb/sys/user/GetWjtTbl.php?JinjyaNo=604> 2019年11月3日取得)
- 24) 「南龍院宮御参詣記録」印南町史編集室編『印南町史』資料編 pp.47-54 第一法規出版 1987年
- 25) 「五躰王子宮御鎮座并御宮造管記」印南町史編集室編『印南町史』資料編 pp.60-94 第一法規出版 1987年